新しいコレクション

二十代堆朱楊成《彫漆六華式平卓》

二十代堆朱楊成（1880 -1952）
《彫漆六華式平卓》

1915年
漆
高さ 11.5, 径 37.6cm
平成24年度購入

本作《彫漆六華式平卓》は、六弁の花びら形をした天板を持つ卓で、重厚感に溢れた作品です。全体は、漆を何千回と塗り重ね厚い層にして、そこに模様を彫り込んでいく彫漆という技法で装飾されています。通常漆は百回塗ってようやく厚さ三ミリになると言われ、こうして塗り重ねられた漆はずっしりと重くなります。本作も例外ではなく、一番下に朱色、次に黒、朱、黒、黄、黒、朱、緑、朱、黒と異なる色の層を重ね（全十層）、素材の重みが見た目に結びついています。

しかし、こうした物理的な要因以外にも、この重厚感には理由がありそうです。天板中央の丸い縁取りの中に黒漆で表されているのは、向かい合う双龍。そのまわりには、獅子や孔雀といった六種の鳥獣が同じく一対で表され、背景は葡萄の実のついた唐草文で埋め尽くされています。いずれも美術工芸の長い歴史のなかで好まれてきたモチーフです。とりわけ茶の湯の世界では、和物に対する唐物の重厚感を演出するものとして用いられます。

作者の二十代堆朱楊成（一八八〇―一九五二）は、代々彫漆を家業とする家に生まれました。初代楊成は、室町時代、中国から渡来した堆朱彫を模倣制作しその出来が素晴らしかったことから、賞賛され、我が国における堆朱彫の元祖となったといわれています。その技は連綿と受け継がれ幕末に至りますが、明治の政変後は一時中断を余儀なくされます。二十代の兄、十九代楊成が家業を再興するも夭折。二十代は、兄の意志を継ぎ、大正から昭和にかけて数々の充実した作品を残しました。本作の重厚さが、唐物趣味を如実に反映した部分に多くを負っているとすれば、それは二十代がまさに五百年におよぶ先祖伝来の技を正統に受け継いでいる証です。

黒漆を基調として異なる色の漆の層を彫りの断面に見せる「黒金糸」と呼ばれる手法に、「紅花緑葉」（花の部分を朱漆、葉の部分を緑漆になるよう彫り表した彫彩漆技法）を併用して、モチーフを巧みに色分けするなど、伝統技法を自在に使いこなしている様子が本作からもうかがわれます。

一方で、二十代は渡来品の写し物を嫌い、創作性を重視したことでも知られています。刀を漆面に垂直に深く彫り込み、モチーフをシャープに浮き出させるスタイルは、中国伝来の堆朱、堆黒作品との違いを際立たせるため、二十代が特にこだわった点でした。彫技を明治の彫刻家・石川光明に学んだ二十代は、写実性を作品に取り込もうとするなど、近代の創作精神にのっとって制作を進めました。家業の存続と創作の狭間で制作にあたった二十代堆朱楊成の気迫が、この作品に一層の重みを与えているようです。

（工芸課主任研究員　北村仁美）